

介護行為を記録にいかす

～介護行為の蓄積と介護の専門性構築にむけて～



学校法人 滋慶学園 東京都認可の専門学校

東京福祉専門学校

副学校長 白井孝子

介護行為のみえにくさ①

【事例から】

佐藤さん（男性）は介護施設に入所している利用者です。

いつもは、リビングでユニットの皆さんと食事をしています。しかし、今日は娘さんが3か月ぶりに面会に来ていました。居室でお二人くつろいだ様子で笑い声も聞かれました。

そんな様子を見ていた介護職員の田中さんは、居室に食事を運び「お二人でゆっくりお食事をしてください」と言って居室をでました。娘さんが帰る時「うちの父だけ、何故皆さんと一緒に食事をしていないんですか。かわいそうじゃないですか！」と訴えてきました。

家族の苦情につながったこの事例は、何がいけなかったのでしょうか。

介護行為のみえにくさ②

【介護職員田中さんの行動の背景】

佐藤さんは、娘の面会を楽しみにしており、娘が面会に来たらゆっくり居室で過ごしたいという希望を言葉にして介護職員田中さんに伝えていた。そこで介護職員は田中さんは、佐藤さんの思いを実現しようとして食事を部屋に運んだ。

しかし、そのようなことは知らない娘さんは、何故自分の父親だけ、部屋で食事をしなければいけないのかという思いから、苦情として訴えてきた。介護職員の田中さんがおこなった行為は、利用者の思いを知っていたからこそその行為であった。

この場で、介護職員の田中さんがその理由を伝え、どうするか確認していれば穏やかに過ごされた場面であった。

介護福祉職が行う介護行為

目的： 利用者の生活の維持及び質向上のために、よりよい介護実践を行う。

行動： 利用者との関わりを通して「いつもと違う」「こんなことができる」「こうした方が良いのではないか」と介護行動を通じて感じ、考えて行動している。しかし、介護は意図的に行われているが、さりげなく行う行為であるから、何故そのように行うかみえにくい。

そこで： みえにくいといわれる介護を、なぜそのように行ったのか、行為の理由・根拠を利用者やその介護者、連携する多職種に伝える力が求められている。

介護福祉職は常に自分の行動や判断の意味を考え、実践を続け、自分の行為をふりかえり、介護行為の質を上げてゆく必要がある。しかし、行う介護行為は、言葉にしたり記録しておくことでしか、残っていない。のこされた記録は介護行為の行動や判断の蓄積となって、介護の専門性構築につながるのではないか。

介護職員の専門性とは何か①

■見えにくい専門性をみえるようにする

- 介護職員の行う行為の専門性は、生活の支援の中からうまれてくるもので見えにくい。
- しかし、反面関わる他者にその行為の理由・根拠を明確に伝えてゆくことが求められている。何故その行為を行うか、明確にすることを続けてゆき、介護の専門性を帰納法で伝えてゆくことが必要ではないか。

■そのため記録を残し、検証する場と時間が必要ではないか

- 記録の目的と意義でも、介護チーム連携における情報の共有化と従業者の質向上につながる。経験の浅い職員が先輩職員から観察すべき内容や援助内容を学ぶ機会となり継続した援助が可能になるとされている。

■介護行為と記録を残すためには

- 介護過程の展開、そのプロセスを用いて記録に残すことが必要であるのではないか。

介護職員の専門性とは何か②

■ 利用者の思いや希望は重要な根拠情報の1つである

- 介護職員の行う行為でよく聞かれるのは「利用者の希望だから」という言葉がある。
- 利用者の希望は重要な根拠情報の1つであるといえる。

■ なんでも「利用者の希望だから」といい、根拠を明確にしていけないのではないか

- 利用者の希望でも、聞ける希望と、聞けない希望がある。
- そのすみわけを考える際に必要なものの1つとして、利用者の健康にかかわるところとからだの情報や健康状態であるともいえるのではないか。
- この点に関しての専門家は医療職であるともいえる。利用者を中心として連携することで介護職員の知識レベル向上ができる。

■ 介護職員の専門性とは

- 利用者の思いや生活状況、生活歴の重要性を理解した専門職が、利用者の心身の状況に応じた介護を行うことであると定義してみることも可能ではないか。

介護現場における介護過程の展開の実践

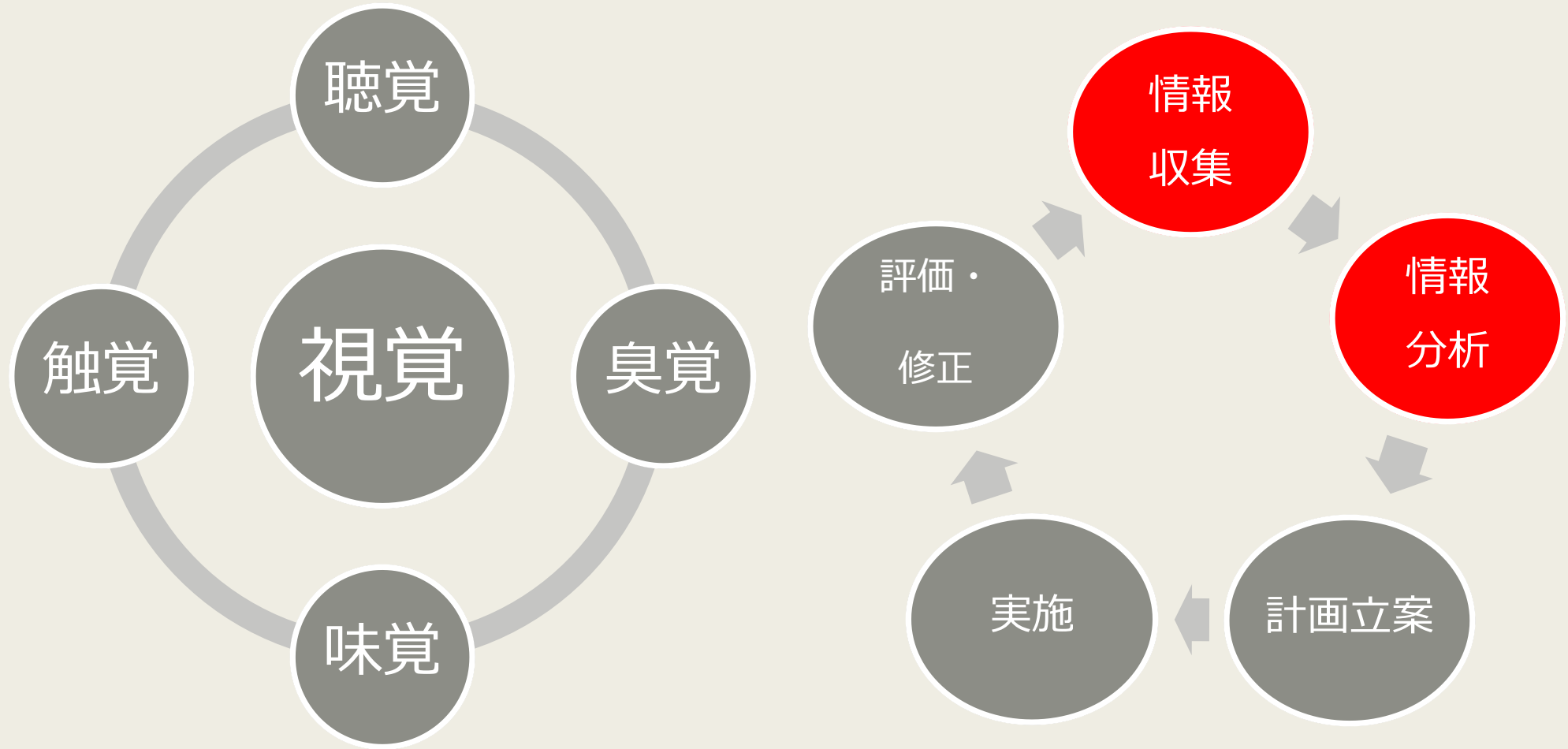
■ 介護過程

- 問題解決と目標思考的過程である。
- 介護福祉職による一連の過程であることから、介護福祉士は専門的かつ科学的な思考を身につけることが必要になる。
- 利用者と介護福祉士との関係が継続する 限り続くものである。

■ 介護実践の特徴

- 利用者に対しての説明と同意が必要である。➡その際の根拠が必要
- 利用者に自由に選択できるように保証する必要がある。
- チームワークが必要であり、根拠ある目標に沿った計画の実践と、振り返り評価修正が必要である。

介護職員の専門性向上にむけての行為と考え方



介護過程の展開方法

■ 介護現場で介護職員が行う介護過程とは①

- 個別介護計画を把握する必要性
- 施設介護サービス計画（施設ケアプラン）の把握
- 介護支援専門員が作成する施設介護サービス計画（施設ケアプラン）と関連する
- 介護の専門職としての視点で計画する

■ 介護現場で介護職員が行う介護過程とは②

- 入所後あるいは現在の状態像を把握し、必要な介護とその根拠を明らかにするためのアセスメントを行い、その人にとって、安全で、持っている力を最大限発揮できるための介護方法を考え、実施し、評価するという思考過程、それが介護過程である。

介護過程の意義と目的

■ 介護過程の意義

- 1 意図的に行う行為の道筋を明確にする
- 2 根拠ある介護
- 3 科学としての介護の理論化

■ 介護過程の目的

- 1 介護の根拠を明確にする
- 2 なぜ、介護が必要なのかを言語化する
- 3 目標の共有化、他職種との連携

介護職員の専門性向上にむけての考え方

■ 様々ある介護記録

- 介護記録の方法には、多くの考え方がある。

■ まず実践してみる

- 何が良いか、合うのかは、介護現場ごとに多少の変化はあると考えられる。
- そこで、介護職員は実践から振り返りを、より良い方法を構築してゆくことが必要。

■ 何が良いかは関係者で協議

- はじめは、関わる介護職員の意識を統一し見直し時期を明確にして実践。
- その後の見直しには関わる介護職員全員の話し合いの場が必要。
- 未熟な組織である場合には、介護職員のリーダーの存在も必要。

介護職員の専門性向上にむけての記録

■利用者へのケアを振り返ることができるようになる

- 整理された記録をしていくことで、介護職員自ら、利用者のケアを振り返るポイントに気づくことができるようになる。

■他の介護職員、多職種との振り返りの機会になる

- 記載された記録を振り返ることで、他の介護職員と利用者のケアについて議論を行ったり、看護師等多職種とも議論を行うためのデータを蓄積することが出来る。

■記録を蓄積することで、科学的介護を実践のための基礎データとなる

- 「科学的介護」の実践のためには、介護サービスにおいてもエビデンスを集めて情報を蓄積し、それを分析することによって利用者に提供される介護サービスの根拠を提示していく必要がある。厚生労働省では、利用者のADLや認知症に関する情報、食事摂取量や口腔の情報など、を集めるデータベースの作成を進めています。このデータベースを「CHASE（チェイス）」という。
- 「CHASE」が本格的に稼働し、介護保険総合データベース、VISITと連結されることによって「CHASE」のデータベースが電子情報として蓄積される。
- これらの蓄積した情報を分析することで、利用者が適切な介護方法を選択できる、自立支援・重度化防止に対して効果的なアプローチが図れるようになる等、期待できる。